



冬子磨

享保
丑^癸十八年
1788





冬に磨

表八句

時多うれ景多うや増海暮奇
 小う心の風平暮船乃賭
 羽記無朋鳥より毛始りく
 き先始家来に柱光りて
 傘乃金訓口の多き音掛
 為替取らるる諸隙の影
 素うてひに隣証うけく月八宵
 國と卷く紅新乃挽後



沾旭

露月
 午寂
 安士
 止水
 且調
 咫尺
 立圃

一晒三顧

字音の皮着てしや吹拂行博
晴雨やと種別記色ハ昔より

佳風

黄州

藤系

掃く夏庭紫地走ふやうも木葉が

雪井

全

如里とく傍籠ふおれ葉ふお

五千叟

夜とれく風流屋一とやのち葉ふ

水國

初書

神宮や雲やもさき好み中斬

貞佐

冬月句

山々の冬木とつちをれお葉ふお

午寂

口切や所をあらも昔のしを

素丸

口切やさめね中くよまおおね

珪琳齋

振めまおお候乃言はよ冬月

咫尺

葉おけて日たのこ河をひや於育テ

安士

時雨

乙の月お秋戸とふ東也海面分

長水

釣人の影おさるけしうれり如

宗瑞

空おとあつた暮う海をれれ

立儿

北越本保

糸河豊後成口乃海よもせり
たむし思ふ

蕩りおのろし海にぞ初見袖付
濡りしとくしや海面乃馬車
下枝にゆれは仕業かこし

一曉
露調
蓮如

海船寄白

ふれや実な振袖はわつら
虫のきそをなすもなほ
く川舟やさき野の雲
送るきく里より他方
雲行はゆれとつらんと物

山洲
素水
和水
柴荷
貞甫

橋沾家士

東洲

黒洲

氷洲

止水

蓮如

蓮川

沾志

芦鶴

了山

水巴

菊山花や今日新をそは咲
因ふぬく色わねる
惜けぬく素足乃
釘もらも誰か海より
く川舟乃さき野の雲
く川舟乃さき野の雲
新代乃巻や玄猪は
尾懸しそは草居る
神宮の奴まはる
茶屋の世家よ

風や山は海に頭巾をかぶり袖
袖空のや跡掃きまき八丈の字
曉を志は妙花一人を香牡丹

志くれ

洗多海う路へふ藤一初海雨
むく時白黄麦守は雞の音
回多くの琴柱より翔やこれ音
生破と治先（新）一（事）の非
醉醒は肌へ志くれ志くれ
梅の尾より海西中へ志くれ

音浪うきり海面は十二律
籥のけり傘を空にけり雨白
凡山よ入りの藤はこれこれ
志くれや松より若く海かきを凡
春空へ来てそくは小次海面
一時白乾きまきり白くは海
拾人は九人の化はこれこれ
夢紙賣しこれ来まきり役共海
志くれ来まきり山と海とや志くれ者
官人は續おせこれこれ

八王子

又北

武列扇町

枝葉

立圃

宋我

幸魚

青隆

橋沾家士

庭洲

同

橋秋

百丈

午山

音雲

木昌

文雅

芦鶴

世風

野島吉田

志葉

秀圃

且調

露月

時雨

物もこれ尚も舞余未だ乃光り如
行人の一日なぬれとくれば

成屋
来川

題
河

今日も中々な響り

網麻の初雪

寛
漸
行

橋
沾

享保十八癸亥

彫工

吉田守白

石井硯堂氏
三十

OCT 14 1936

